

『うたたね』の夢

劉 小 俊

題について私見を述べてみたものである。

二

「うたたね」に見られる「夢」という言葉の用例は、この作品に書かれている事件の経過に従ってみれば、大体次の五群に分けられると思われる。

第一群 恋の回想や恋人の訪れを書き記した部分で、前半の前半に集中している。ここに見える「夢」という言葉は全部で五例、全体の三分の一を占めているが、すべて恋に関係するもので、恋の代名詞となっているとも言える一群である。次にその五例を挙げてみよう。

(一) 夢うつつとも分きがたかりし宵の間より、閑守のうち寝る程をだに、いたくもたどらずなりにしにや、打しきる夢の通ひ路は、一夜ばかりの途絶えもあるまじきやうに恨らひにけるを… (一五八)

(二) さすがに絶えぬ夢の心地は、ありしに変わるけぢめも見え

「うたたね」は阿仏尼が自分の若い頃の恋と失恋を日記ふう書き記した作品である。彼女の晩年の作である「十六夜日記」と比べると、未熟なところもあるとは思われるが、初恋の初々しさと失恋の悲しみをリアルに描いた作品として注目される。阿仏尼の生涯に関する資料が少ない中で、彼女自身の筆になるこの若き日の日記が、その青春期における人生史の一駒を埋めるものとしても重要な意味を持っているのは言うまでもない。

「うたたね」の語彙の中に、注目すべき言葉が一つある。それは作者が自分の心情を表わすのによく使う「夢」という言葉である。岩波書店の新日本古典文学大系本で言えば、わずか二十ページ足らずのこの短い作品の中に、「夢」という言葉が十四回にわたって使われている。阿仏尼がなぜこの言葉をたびたび使ったのか、彼女にとって「夢」という言葉がどんな意味を持ち、また、彼女がこの言葉を通じて何を表わしたかったのか、本稿はこの問

ぬものから、とにかくに障りがちなる葦分けにて、神無
月になりぬ。(一五九)

(三) 例の人知れず中道近き空にだにたどしき夕闇に、契
り違へぬしるべばかりにて、尽ませず夢の心地するにも、
出で聞えん方なければ、たゞ言ひ知らぬ涙のみむせ返り
たる。(一六〇)

(四) 「君や来し」とも思ひわかれぬ中道に、例の頼もし人に
てすべり出でぬるも、返すく夢の心地なんしける。(一六一)

第二群 幻覚を指す用例である。この作品の前段の後半、作者
が出家を決意するときの心情を書き記した節に見られ、次の一例
しかない。

(五) まづかきくらす涙に月の影も見えずとて、仏など見え給
つるにやと思ふに、恥かしくも頼もしくもなりぬ。(中
略) よしや思へばやすきと、理に思ひ立ちぬる心のつ
きぬるぞ、有し夢のしるしにやと嬉しかりける。(一六二)

第三群 作品の前半の後段に見られ、出家を決意した作者が、
ある夜家を出て、雨の中、西山にある尼寺に向かう途中の状況を
描いた部分にある。

(六) こも都にはあらず、北山の麓という所なれば、人目し
げからず、木の葉の陰につきて、夢のやうに見置きし山

路をたゞ一人行心地、いといたく危うくもの恐ろしかり
ける。(一六四)

第四群 失恋の苦しみから逃れるために出家した作者が、世の
中のはかなさを嘆くのに使われているものであり、前段の後半に
見られる。その中の(9)はこの作品の題名の由来となっている
といわれる歌である。

(七) ゆたのたゆたに物をのみ思ひ朽ちにし果は、(中略) 仮
の世の夢の中なる嘆きばかりにもあらず、暗きより暗き
にたどらむ長き夜のまどひを思ふにも、いとせめて悲し
けれど、心は心として…(一六七)

(八) 宵居すべき友もなければ、あやしく敷きも定めぬ十符の
菅菰にたゞ一人うち臥したれど、解けてしも寝られず。
はかなしな短き夜半の草枕結ぶともなきうた、ねの夢
(一六九)

(九) 日頃経れど、訪ひ来る人もなく心細きまゝに、経つと手
に持ちたるばかりぞ、頼もしき友なりける。「世皆不平
固」とある所を、強ひて思ひ続けてぞ、憂き世の夢も自
ら思ひ醒ますたよりなりける。(一七〇)

第五群 「うたたね」の後半に見られ、遠江にある養父の家へ
旅立つ途中の苦勞と、そこに泊まっていた頃の作者の都への懐し
さを表わしている。

(十) いづくの野も山もはるくどと行くを、泊りも知らず、人

の行くにまかせて夢路をたどるやうにて、日数経るま、
に、さすが慣はぬ鄙の長路に衰へ果つる身も、われかの
心地のみして： (一七二)

(十一) 荒磯の波の音も、枕の下に落ち来る響きには、心ならず
も夢の通ひ路絶え果ぬべし。

心からかゝる旅痕に嘆くとも夢だに許せ沖つ白波
富士の山は、たゞこゝもとにぞ見ゆる。雪いと白くて、
風になびく煙の末も夢の前にあはれなれど、「上なきも
のは」と思ひ消つ心のたけぞ、もの恐ろしかりける

(一七四)

以上の五群をまた大きく二類に分けられると思う。第一類は第
一群の五つの用例で、第二類は残りの四群を含めている。

三

以上「うたたね」に使われている「夢」という言葉の十四の用
例を自分なりに分類してみたが、次にそれらについて詳しく述べ
てみたいと思う。前述したように、第一類に属する「夢」の用例
は、いずれも作者が恋に夢中になっていた頃の心情を表わしたも
のである。無論、「夢」という言葉は作者の当時の気持ちの現わ
れであるが、それと同時に作者が求めていたものでもあると考え
られよう。ここで第一類に属する「夢」という言葉の用例の分析
によって、この時期、すなわち恋に落ち、期待と不安で心が激し

く揺れていた時期の若い阿仏尼にとつて、「夢」とはどんなもの
であったか、また彼女が期待していた恋とはまたどんなもので
あったのかを探ってみたいと思う。

前掲(一)の引用中、「夢うつつとも分きがたかりし宵の間」
とあるのは、恋人の最初の訪れを指しているが、すでに指摘され
ているように、その表現は「伊勢物語」第六十九段に見られる。

君や来し我や行きけん思ほえず夢かうつつか寝てかさめてか
という歌によるものだと思われる。またその後の「関守のうち寝
る程」云々も、同じく「伊勢物語」第五段の歌、

人知れぬわが通ひ路の関守は宵宵ごとにも寝なむ

を踏まえている。このように、作者の阿仏尼は「伊勢物語」を踏
まえて自分の心情を書き記しているが、作者をそうさせてたのは
彼女の豊かな古典文学の教養だけではなく、彼女自身にある一種
の潜在意識のあらわれでもあると思われる。少々長くなるが、次
に「うたたね」に見られる恋人の最後の訪れを書き記した部分を
掲げてみよう。

例の待つ程過ぎぬるはいかなるにかと、さすが目も合はず身
じろき臥したるに、かの小さき童にや、忍びやかにうち叩く
を聞きつけたるには、かしこく思ひ鎮める心もいかになりぬ
るにか、やをらすべり出でぬるも、われながら疎ましきに、
月もいみじく明ければ、いとほしたなき心地して、透垣の折
れ残りたる隙に立ち隠るも、かの常陸宮の御住まひ思ひ出

でらるるに、「入る方寮ふ人の御様ぞ、事違ひておはしけれ」と、立ち寄る人の御面影はしも、里分かぬ光にも並びぬべき心地するは、あながち思ひ出でられて、さすがにおぼし出づる折もやと、心をやりて思ひ続けるに、恥かききことも多かり。
(一六一—一六二)

お分かりのように、これは、『伊勢物語』第六十九段と『源氏物語』の末摘花巻を念頭に置いての描写である。ここで、作者は「月夜」、「童」など古典物語の中でよく使われている舞台設定を利用して、自分の経験を物語ふうにならせようとするばかりではなく、恋人を光源氏に譬えて、自分の恋が王朝のロマンスである事をさりげなく伝えようとしている。『源氏物語』にも書かれている落魄の常陸の宮の住まいのような我が家に来て来た、光源氏にも匹敵するほどの貴公子が、明るい月の下で、冗談を言つて戯れるこの場面が、王朝物語の夢幻的な世界を連想させるものになつてゐるのは、そのためにほかならない。

この一節だけではなく、この作品の中には、『源氏物語』などの先行文学に見られる場面設定や、表現を踏まえたところが数多く見られるが、いまは次の一例を加えるだけにとどめておく。

泣くく門を引き出づる折しも、先に立ちたる車あり。前華やかに追ひて、御前などことごとくしく見ゆるを、誰ばかりにかと目留めたりければ、かの人知れず恨み聞ゆる人なりけり。顔しるき隨身など、紛ふべうもあらねば(中略)今一度それ

とばかりも見送り聞ゆるは、いと嬉しくもあはれにも、さまざま胸静かならず。
(一六九)

これは、作者が病氣のため、尼寺から愛宕へ移る途中、別れた恋人との邂逅を書き記した一節である。身分の高い男が先払いをさせながら華やかに車で通りかかるのが偶然に女の目に入る。女はその中に顔見知りの隨身がいたことから、それは昔の恋人の車だと分かつてさまざま心が乱れるが、男は女の存在に全然気がつかない。この情況は、『源氏物語』の夢浮橋巻に描かれている浮舟が遠くから薫の車を見やる場面と酷似している。

以上の二つの例には類似点が見られる。それは高貴な男性が登場すること、その男性と恋人関係にある、決して高い地位にいるとは言えない女がいるということである。つまり、『うたたね』の作者阿仏尼が、自分の恋人を古典物語に出てくる男性の主人公に、自分を身分の高い男と悲恋をする女にそれぞれ譬えてゐると言えよう。

身分違いの恋というのは、しばしば古典物語に取り扱われるテーマである。この作品からも分かるように、作者の阿仏尼は豊かな古典文学の知識の持ち主であり、『伊勢物語』や『源氏物語』などの作品を熟読していたことも容易に想像できるだろう。多感な少女時代に、彼女は『源氏物語』を何回も何回も読みながら、光源氏のような人に愛されることをひそかに期待し、王朝物語の恋の世界を夢見ていたに違いない。そして、安嘉門院に仕えてい

た頃、貴公子たちに接触する機会ができて、その中の一人と恋に落ち、「うたたね」に書かれたような恋をしたのであるが、その恋は阿仏尼にとって、まさに夢見ていた物語の世界のような出来事であった。作者が自分の恋を回想し、それを書き記した際に「夢」という言葉を繰り返して使ったのはこのためだと思われる。言い換えれば、つまり前掲の第一類の「夢」は王朝物語の「夢」だったのではあるまいか。

四

前節では、「うたたね」に見られる「夢」の用例の第一類について述べたが、次は第二類の用例について述べてみたいと思う。第二類には、一見違ふ四つの群を含めているが、それらには共通点が見られる。すなわち、第一類の用例とは違って、これららの用例を用いて作者が表わそうとしたのは、憧れの貴公子と憧れの恋をし、王朝のロマンを体験していたときの夢のような恋心ではなく、その恋が破局に終り、そのショックを受けたときの、あるいはそのショックから立ち直ろうといういろいろ試みているころのつらい心情を表わしたものである。第一類の用例を「甘い夢」とするならば、第二類の用例はその「夢」から目覚めた後、現実の敵しさに直面した時の「悪夢」であると言えよう。

恋人の訪れが途絶えた後、失恋の悲しみと苦しみから逃れるために、作者は夜中に尼寺へ駆けつけたが、尼寺へ向かう途中の苦

勞は、失恋のショックで既に精神的に追いつめられていた作者に、更に肉体的な打撃を与えた。その時の辛さを表わすため、作者は同じく「夢」という言葉を使った。その用例は第二類の第三群に見られるが、ここでその用例と関連する前後の部分挙げておきたい。

晦日比の月なき空に雨雲さへたち重なりて、いともの恐ろしう暗きに、夜もまだ深きに（中略）木の葉の陰につきて、夢のやうに見置きし山路をたゞ一人行く心地、いといたく危うくもの恐ろしかりける。山人の目にも咎めぬまゝに、あやしくもの狂ほしき姿したるも、すべて現のこととも覺えず。（中略）入る嵐の山の麓に近づく程、雨ゆ、しく降りまさりて、向への山を見れば、雲の幾重ともなく折り重なりて、行く先も見えず。かろうして法輪の前過ぎぬれど、果ては山路に迷ひぬるぞ、すべき方なきや。惜しからぬ命も、たゞ今ぞ心細く悲しき。いとゞかきくらす涙の雨さへ降り添ひて、来し方行先も見えず、思ふにも言ふにも足らず。

（一六四—一六五）

ここに「夢のやうに見置きし」とあるのは、定かでない尼寺への夜道のことを指しているが、このような夜中の家出はかつて夢にも思っていなかった気持ちを重ねて表われている。また、「あやしくもの狂ほしき」や「来し方行く先も見えず」などの表現は、失恋した後の作者の心情そのものだとも言えるだろう。ここで、

失恋した直後の、余りにも大きなショックで理性を失い、精神的に苦しんでいる作者の心を、雨の降りしきる夜中の山路を狂ったように疾走する作者の姿と重ねつつ、更に「夢」という言葉を用いて効果的に表わしている。この「夢」に見られるのは作者の激しい感情の起伏である。作者は後でこの事を反省し、次のように書いている。

ゆたのためゆに物をもみ思ひ朽ちにし果ては、現心もあらずあ
くがれそめにければ
(一六七)

作者自身の言葉を借りて言えば、この時期の作者の「夢」は「現心もあらず」という心情である。

同じ「夢」という言葉であっても、第四群の用例に表われているのは、全く別の気持ちである。この群に入る三つの用例は、出家後の作者の生活を書き記した部分に見当たると。前述の夜中の家出を経て、作者は出家の志を実現させた。この時期の作者は、恋人への未練がまだ絶ち切れず、時にはまた彼に対する思いで悩まされるが、尼寺の環境が彼女の乱れた心にある程度落ち着かせた。その尼寺の様子を作者は次のように書き記している。

さてこの所を見るに、憂き世ながらか、る所ありけりと、す
ごく思ふさまなるに、行ひ慣れたる尼君たちの、宵あか月の
閑伽怠らず、ここかしこにせぬれいの音などを聞くにつけて
も、そゞろに積りけむ年月の罪も、か、らぬ所にて止みなま
しかばいかにせましと思ひ出づるにぞ、身もゆる心地しける。

(一六七)

このような静寂な尼寺は、心の傷を癒すのに絶好の場所だと言えるだろう。ここで、恐らく作者の阿仏尼は自分のしたことをゆつくり反省することができたであろう。そして失恋のショックによって起った感情の嵐が静まり、一時失った理性も取り戻すことができた。しかし、作者の心に残ったのは、夢から目が覚めた後の虚しさである。従って、この時期に用いられた「夢」という用例に見られるのは(本論の二を参照)感情の激しい起伏ではなく、一種の虚無感である。この三つの「夢」という言葉は、無常の世の中を指すと共に、自分の短かった恋を指しているのも明らかであろう。またその前後の記述から見れば、作者が出家の生活を理想化し、現実から逃避しようとする姿勢をも読み取ることができるのではあるまいか。

しかし、第五群の用例に入ると、第四群に見られた虚無感はなくなり、作者の目はもつとよく現実を見つめるようになったばかりではなく、自らそれに従おうとする姿勢さえ見られる。そもそも作者が出家後まもなく、自分の出家が一時的な発作によるものだったと反省し、仏に縋つても、自分の悩みが消えないという事実を認めて、恥ずかしさを押さえながらも、実家にまた戻ることを実行したのである。その後、彼女は養父の誘いを受けて遠江への旅に立った。実家に戻ったことと旅を決意したことは、彼女の現実には立ち向かおうとする姿勢を裏づけているのではなからうか。

第五群の用例の中でも特に注目すべきは、前掲の用例の中の(十)の(13)だと思ふ。

心からかゝる旅寝に嘆くとも夢だに許せ沖つ白波(一七四)

この歌には都に対する懐しさが詠み込まれているが、一方では動かし難い現実に対する作者のどうしようもない気持ちも読者に伝わってくる。ここまで来て作者には、ようやく現実の中にある自分の境遇が見えるようになったらしい。したがって、この時期の「夢」は、作者にとつて現実の中に慰めを求める手段になつていたと思われる。

五

以上「うたたね」の世界に見られる「夢」という言葉の用例を分類し分析してきたが、ここで結論を出したいと思う。

「うたたね」における「夢」という言葉は、ひとつの軌跡を辿って使われていると思われる。その軌跡は、この日記の作者である阿仏尼の成長の軌跡でもあると私は考えている。まず第一群では、まだ未熟な少女の王朝ロマンの恋に憧れるその夢が描き出される。この時期の「夢」という言葉は読者に幻想の世界を見せている。続いて第二群と第三群では夢が蔽れた直後の作者の混迷に陥っている様子を描き出している。この時期の作者の気持ちは大分乱れているが、その中で目を夢の世界から現実に向け始めたと言えよう。そして第四群では、混迷した後の作者のある程度沈

静した心が表わされている。この時期の作者の気持ちには虚無の影も見られるが、第三群において見られたような感情的な衝動はすでに消えていた。更に第五群では、現実往直面し、現実に従おうとする作者のもつと成長した姿を見ることができる。

まとめて言うと、「うたたね」に使われている「夢」という言葉の用例の配列は、現実からかけ離れた世界に耽け込む頃↓現実に目覚め始める頃↓現実から仏教の世界に逃避しようとする頃↓現実往直面する頃、という軌跡に基づいていると思われる。そしてこの軌跡は作者の阿仏尼の成長の過程そのものでもある。阿仏尼は「夢」という一つの言葉で、自分のその折その折の心情を巧みに表わしているだけではなく、それと同時に自分の成長をも書き記したのである。燃えるような恋が破局で終るといふ激しい感情の変化を体験し精神的に成長した後、自分の未熟な頃の初恋を顧みて、その中で自分の成長を見つめ、それを書き記したのがこの「うたたね」だったのであるまいか。

〔注1〕 次田香澄「うたたね全注釈」(講談社学術文庫、昭和五十三年)の「解説」による。

〔注2〕 「中世日記紀行集」(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九〇年)など。

〔注3〕 拙稿「うたたね」と浮舟」(『岡大國文論稿』第十八号、平成三年三月)参照。

△テキスト▽ 「中世日記紀行集」(新日本古典文学大系、岩波書店一九九〇年)

△参考文献▽ 次田香澄「うたたね全注釈」 講談社学術文庫 昭和五十三年

玉井幸助「日記文学の研究」 堀書房 昭和四十年

今岡敏子「中世女流日記文学論考」 和泉書院 昭和五十八年

(甲南女子大学大学院博士後期課程)

研究室受贈図書雑誌目録(一)

(平成三年一月―十二月)

単行本

訂正新編古事記(山田實氏寄贈)

二十一世紀初頭大阪口語の実態——落語SPレコードを資料として——(真田信治・金沢裕之編)

日仏対訳勝野郁子詩集(花神社、勝野郁子・安本マルレーヌ訳)
物語・説話等モチーフ集 試作第2版(神山重彦氏寄贈)

雑誌・紀要

愛知淑徳大学国語国文 第十四号

愛知大学国文学 第三十一號

愛文(愛媛大学法文学部) 第26号

青山語文(青山学院大学) 第二十一号

旭川国文(北海道教育大学旭川分校) 第七号

飛鳥の源流(飛鳥資料館)

跡見学園国語科紀要 38号、39号

跡見学園女子大学国文学科報 19

跡見学園短期大学紀要 第28集

魚津シンポジウム(洗足学園魚津短期大学) 第6号

宇都国語論究(宇都宮大学国語教育学会) 第3号

宇都国文研究(宇都短期大学) 第22号

愛媛国文研究(愛媛国語国文学会) 第40号

愛媛国文と教育(愛媛大学教育学部) 第22号

大阪青山短大国文 第七号

大谷女子大学国文 第21号

大妻国文(大妻女子大学) 22

大妻女子大学文学部紀要 第二十三号

学苑(昭和女子大学近代文化研究所) 六一五号

学術研究国語国文学編(早稲田大学教育学部) 第三十九号

学大国文(大阪教育大学) 第34号

香椎潟(福岡女子大学) 第36号

活水日文(活水学院日本文学会) 22

活水論文集 日本文学科編(活水女子大学・短期大学) 第三十四集

金沢大学教養部論集 人文科学編 28―2、29―1